

私たちが考える万博

第2回 大阪・関西万博2025に盛りこみたいもの

開催を6年後に控えた2025年大阪・関西万博。1970年の大阪万博から55年ぶりの開催となる万博をどう考えていくのか。池永寛明大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所顧問を中心に「大阪・関西万博会議〜ワイガヤサロン〜」などを通じて、多角的に考察していく。今回のテーマは「大阪・関西万博2025に盛りこみたいもの」である。

構成 加藤しのぶ



池永寛明

いけなが ひろあき

大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所顧問。1955年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部に人事勤務、営業部門にてマーケティングに関わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年に同研究所所長に。2019年より現職。

「私たちが考える万博」連載第1回(前号)では、これまでの博覧会が行われた背景について考察しました。その視点として重要なのは、過去の万博をノスタルジーの目線で語るのではなく、過去から現代・未来につながる「時代の潮流・変化の構造」で捉えることです。1903(明治36)年の第5回内国勸業博覧会にはじまる大阪で行われた主要な博覧会の流れから、殖産興業や教育、消費文化の普及にとどまらない、都市・産業戦略の一環として開催されてきたことがわかりました。つまり、100年の計で大阪の近代化をもくろんだ、「大大阪」に至る明快なブランドデザインが背景にあったわけです。

そうした背景を踏まえ、今回からは「大阪・関西万博2025に私たちが何を盛りこみたいか」を考察していきたいと思えます。議論の場のひとつとして、「大阪・関西万博会議〜ワイガヤサロン〜」がナレッジキャピタルで立ちあがり、すでに5回にわたり会議を重ねてきました。ワイガヤサロンでの活発

な議論のなかで得た知見と「ルネッセ(再起動)」戦略を掛けあわせて、今私が考える万博をお話します。

「日本のプロトコル」を生み出した大阪・関西だからこそできること

博覧会が都市・産業戦略の一環で行われてきたものであるという文脈のなかで「大阪・関西万博2025」を考える場合、押さえるべき事項として「万博を大阪・関西で開催する必然性・現代性」についての考察があると思います。

1400年の歴史をもち、シルクロードの終着点でもある関西は、世界のさまざまな文化と日本の本質を融合し、「日本的なるもの」といえる独自の洗練を生み出し続けてきました。日本人の知性と感性をもって、日本モード(様式)化するという翻訳・編集力に長けており、コードをモード化するためのベースとなる基盤である「日本プロトコル」を生み出している地です。



ナレッジキャピタルで開催されている「大阪・関西万博会議〜ワイガヤサロン〜」第3回の様子。世代を超えた熱心な討議が繰り広げられている。写真提供/ナレッジキャピタル

CELで3年にわたり進めてきた「ルネッセ(再起動)」の概念に通じるのですが、「大阪・関西万博2025」が世界に提案するものの核として、日本の現状を明確に押さえ、大阪・関西のもつ「日本的なるもの」の本質(コード)を掘り起こし、それを再編集し日本モード化して日本の再起動に結び付けていくことが重要になると考えています。

都市戦略としての万博

「日本的なるもの」をつくる「日本プロトコル」を生み出し続けてきた大阪・関西で開催

すると、必然性をこの万博にどう埋め込むか、どう発信していくかを考えていかねばなりません。

同時に、これまでの博覧会の背景に100年の計で大阪の近代化のブランドデザインがあったように、次なる100年先の社会に向けた実験場として、将来に向けた都市・産業戦略を描き、「大阪・関西万博2025」にて実験・検証するプロジェクトも立ちあげていく必要があります。

「やるからには、史上No.1の万博にしたい」でした。史上No.1にこれまでの万博を超える——つまり、「超万博」。言葉だけならば簡単ですが、現実問題としていかに「超」えるか。70年万博の頃に「現場(会場)がすごい」というだけで人が集まる時代ではありません。かといってバーチャルを駆使した技術偏重でもいけない。単純な「リアル×バーチャル」といった枠組みを超える「超感性」をいかに発見・創造・提示できるかが重要です。

ここでは、「史上No.1の万博『超万博』に向けた5つの考え方」をご紹介します。

史上No.1の万博「超万博」に向けた5つの考え方

① 超「技術」×超「感性」

——人間とはなにかを追求

- リアル×バーチャルという単純な図式にとどまらない超「技術」×超「感性」を具現化。
- 技術を超えるとは、人間とはなにかを追求すること。
- これからの社会における中核的思考とそれをつくり出す方法論の提示。

② 超「時間」×超「場所」

——世界はひとつ。世界をひろげる「時空間」を創出

- 「いのち輝く未来社会のデザイン」(今回の万博のテーマ)に向けて、IoT、AI、ロボット、VR、5Gなど最先端技術と、世界の文化とを融合して、新たな価値をつくり上げる実験場。
- さらに進化する技術と社会の融合により、時間と場所のボーダレス化、これまでの「時間と場所」の概念を超える社会実験場。

③ 超「交流」×超「混合」

——世界から「日本」に来たいと思う「理由」をつくる

- 1970年万博の「月の石」を超えるモノ・コトはなにか。
- 1400年以上も日本の中心地として日本的な文化を生み出し続けてきた大阪・関西がもつ世界各国・地域との交流と混じりあい、新たな価値を創造し続けてきた「日本のプロトコル」とはなにかを示す。
- IoT、AI、VRを超えるモノ、会場に来ないとできないコト、観られないコト、語れないコト、体験できないコト、参画できないコトを会場および会場で実現(とりわけ、大阪・関西に足をこぼないと体験できない、日本料理、人形浄瑠璃、歌舞伎、茶道・華道・書道・建築・庭園・料理など日本のミニマリズム経験を通して、それらの「本質」と「プロセス」を学ぶ場に)。

④ 超「万博」

——これまでの万博の常識を超える「つながりあう万博」

- 大阪・関西万博は180日間のイベントだけでなく、「過去×現在×未来」をつなぎ(超「時間」)、「大阪会場×関西×世界」をつなぎ(超「会場」)、2020年から数えて「万博前5年×万博2025×万博後5年」の10年間がつながりあう(超「会期」)万博とする。
- 「世界はひとつ、世界はつながる」を目指し、これまでの人類のさまざまな技術と文化の伝播・つながりを世界各国からの参加で体感いただき、世界とのつながりの形と未来の姿を示す。

⑤ 「大阪・関西万博2025」を象徴して、ずっと生き続けるシンボルづくり

- 「日本的なるもの」をつくり続けた大阪・関西・日本を象徴する「日本の聖地」をソフト・ハードを構築して将来につなげていく。
- 万博のシンボルをつくる。大阪・関西——通天閣、そして太陽の塔からアマテラスタワーへ。



多様な専門分野から参加者が集い、それぞれの知見から自由な発想で万博を語り合う。継続的な意見交換が新たな万博像を創出する。写真提供/ナレッジキャピタル

で盧舎那大仏像完成を記念して行われた開眼供養会をAI・ロボットを使ったミュージカル形式で再現するというアイデアが寄せられました。開眼供養会では、唐楽、高麗楽、林邑(ベトナム周辺)楽などの国際色豊かな数々の舞楽が奉納され、「雅楽」として現代に承継されていますが、そうした世界との交流の歴史的瞬間を最新技術をもって再現できたら面白いだろうと感じています。

ほかにも、「50年後、100年後を見つめ



1912(明治45)年、第5回内国勸業博覧会跡地にルナパークとともに建設された初代通天閣。写真提供/MeijiShowa/アフロ

たプロジェクト——未来の種をまく『ミライプロ』と題し、かつて70年万博を見た子どもたちにとって、そこで得た感動がその後の力になったように、「大阪・関西万博2025」で、今の子どもたちに夢を与え、未来をつくるきっかけになるアート・カルチャー・サイエンス・テクノロジーをテーマとしたコンテンツづくりやメディア開発を行うというアイデアもありました。

私自身、70年万博開催時は小学校5年生、



70年万博当時、太陽の塔はお祭り広場の大屋根から塔の上半分が突き出すように建っていた。写真提供/Picture Alliance/アフロ

会場には何度も通いました。外国人がたくさんいて会場内のお祭り広場で毎日踊っていてとても明るい場だったという印象があります。今回の万博も、「大阪・関西・日本が面白い」というメッセージをこめながら、次世代にとってよい刺激とも、将来の力となる場を目指したいと思っています。

「大阪・関西万博会議『ワイガヤサロン』」は今後も継続的に開催します。ほかにも万博に関連したイベントが随時行われていく予定です。

これまでの万博をどう「超」えるかを盛りこみながら、大阪・関西の地で世界各国・地域間が「交流・融合・混じりあつてきた」プロセスを実感できるような方法論や、次の時代へあるべき姿・展開を提案しています。

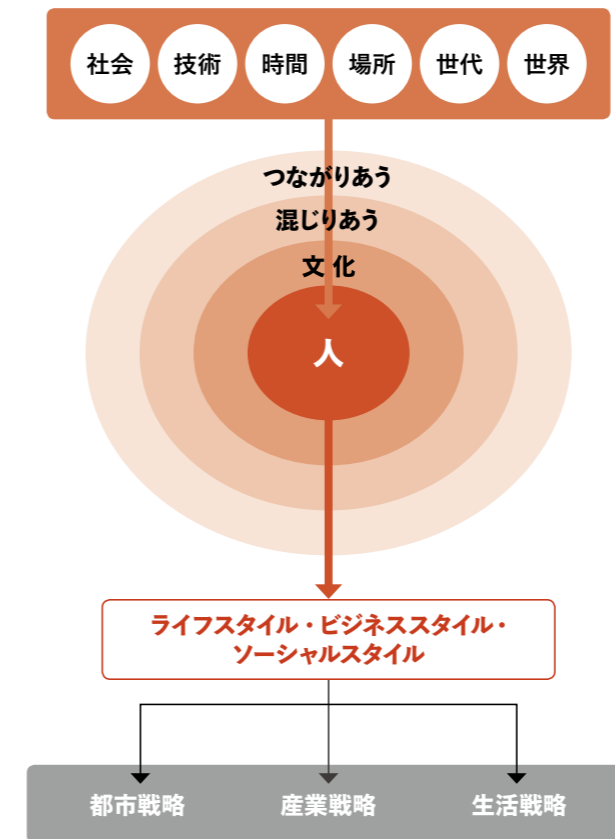
ここで大事になってくるのは、技術と実社会を「どう結び付けていくか」ということ。技術そのものは進化していますが、それが人と社会と乖離している事象が増えています。技術は社会に貢献してこそ意味があるものです。そして、それらをつなぐものは、「洗練する、繰り返し」が本来の意味である「文化」であることを忘れてはいけません。これまで繰り返しお話ししてきた、デンマークのデザインスクールのCEOであるシモーナ・マスキ氏が語った「技術と社会をつなぐのは文化である」という言葉は、万博が目指すものの本質的なコンセプトともなっているとあらためて感じています。

5つの提案のなかで、唯一「超」の単語が入らない⑤については、議論のなかでこうしたシンボルが要るだろうと考えました。第4回パリ万博でのエッフェル塔、京都での第4回国博における平安神宮、大阪の第5回国博跡地開発でつくられた通天閣、そして70年万博での太陽の塔など、シンボルとしてタワーなどがつくられてきたのは、その時代の人々の心および技術を結集する最適な表現方法であったという側面もあります。

そこで「大阪・関西万博会議」ワイガヤサ

ロン」でも、日本の聖地巡礼の場、未来への灯台としてタワーをつくるというプロジェクトを提案しました。名称は天を照らすという意味をこめて「アマテラスタワー」、建設場所として生駒山の山頂をあげています。なぜ生駒山かというと、大阪が大阪湾と瀬戸内海、生駒山と六甲山に包まれた地であり、北に京都・滋賀・福井、南に奈良・和歌山、東に三重・岐阜・愛知、西に兵庫・四国と東西南北を見晴らすかす地であるからです。山頂から見る夕日の美しさはたとえようもなく、また会場となる夢洲からも見えます。日本的なもの原風景の生駒山山頂に、安寧、安全、

■図:「交流」と「混合」から生まれる新たなスタイル



「史上No.1の万博『超万博』に向けた5つの考え方」では、それぞれの提案もあげています。たとえば、④に関連したものでして、752(天平勝宝4)年に奈良・東大寺

安心、防災、日想観など祈りの場であり、また聖地巡礼の場、観光地として、土木・エンジニアリング、情報や環境、モビリティ、エネルギー、リアフリーなど日本技術を結集させてつくるシンボルタワーとなるのではないのでしょうか。

次世代に夢を与え、力となる万博に